

北イタリアの幼児教育

トモコ・ボンツイオ

☆ ミラノの学校

イタリア、ミラノ市に住んで、八年になりますが、イタリアは日本と異なり、気候、風土、習慣、その他あらゆる面で、北部地方と南部地方とは、想像を絶する違いがあります。なぜ、はじめに、このことをいわなければならぬかという点、私のイタリアでの経験は、北イタリアの経験であり、南イタリアのそれではないからです。

ミラノ市は、イタリアの中では、そのすべてにおいて、一番、近代的な都市です。けれども、ミラノに住んで、第一に持った疑問は、学校という建物が見つからなかったことです。日本の、運動場のある学校が当り前であった私にとって、三階から四階建の建物の一部が学校であり、学校の上の人が住んでいるなどということは、思ってもみないことでし

た（ただし、大学はこれと異なります）。学校教育は、一般には午前中のみであり、健康管理、情操教育等は、すべて、個々の家庭で、子どもに与えられなければなりません。

☆ モンテッソーリ・メソードの幼稚園

主人はイタリア人で、建築家ですが、子どもが生まれた時に、第一に話し合ったことは、どんな環境に子どもをおくか、ということでした。カトリックが国教であり、すべてのベースが、その上に成り立っている中で、宗教的に自由な環境を子どもに与えるということは、思った以上に大変なことです。子どもが三歳に達した時、マリア・モンテッソーリ女史のメソードによる、モンテッソーリの幼稚園に入園させました。ここは、小学校までの一貫教育です。子どもは、朝七時五十分にスクールバスに乗り、夕方五時に帰宅します。始

業式などというものもなく、第一日から、当り前のように普通の子どもの生活が始まります。一クラス二十人程度で、先生と助手が、一日の子どもの生活を見てくれるわけですが、イタリア語では、日本で言う「先生」という言葉を用いず、名前を呼ぶという習慣があり、これは、子どもに大きな親近感を持たせているようです。昼食は給食ですが、実に楽しいものです。それをしたという子どもが、特別のエプロンを着て、テーブルセットをし（フォーク、ナイフ、ナプキン、皿等）、給食のサービスを、レストランのボーイのようにします。終われば、それを片付けるのですが、スバゲッテイーに始まり、次は、肉や魚、野菜、果物、アイスクリームやケーキ等も出ます。モンテッソーリでは、決して「押しつけ」ということをしません。子どもが自発的に、こういうことをしたい、ということさせます。

クラスは、幼稚園生活の三年間を通して変わりません。A組に入園したならば、卒業までA組なのです。つまり、クラスに、三歳児もいれば六歳児もいるわけです。したがって、トータル的カリキュラムの必要もないわけで、必要なのは、子ども一人々々の成長を見ながら、子どもの持った興味を伸ばしていくことです。子どもは常に自由でなければならず、何かに興味を持つ、という考えが、モンテッソーリのベ

イスのようです。運動会も、遠足も、学芸会もありません。団体行動をとることが当り前であった私の日本における学校生活と比較してみても、それが全くといってよいほどない子どもの生活に驚きもし、また、興味を持ったことは、ごく自然なことではないでしょうか。

ある日、今日はどんなふうにも一日を過ごしたかと、三歳になる子どもに尋ねると、今日は、午後は小学校五年のクラスにいた、という答が返ってきました。子どもは、五年生の友人が授業を受けている中で、一人で、絵を書いていたそうです。押しつけられたカリキュラムによる生活でないということが、子どもによつて違った影響を与えることと私は思います。なぜなら、あまりに自由で……という声も聞きますから。ただ、体操の時間は、なかば強制的で、その専門の先生がその時間に見え、子ども一人々々の成長に合った体操をさせます。それも、へびとかインディアンの酋長とか、子どもの好きなようなセリフで動作をさせ、そのひとつひとつが、骨格、筋肉の動き、成長のために役立つものであり、興味を引くものでした。

☆ 健康と礼儀作法

北イタリアの都市は、一般に空気も悪く、気候的に恵まれ

ていないため、第一に考えなければならぬことは健康です。当り前のことですが、これがまた大変なことです。中級以上の家庭は、都市郊外に週末の家を持つ努力をします。これは貸家であったりしますが、とにかくいい空気の中で、空気を吸い、太陽を浴びるというだけです。長い長い三ヵ月半（イタリアでは六月中旬から九月三十日までが夏休みです）にわたる夏休みには、都市を離れ、充分いい空気と太陽を子どもに与えるよう、両親は苦勞（？）するわけです。父親の夏休み（一週間から三週間）以外は、一週間を子どもは母親と過ごすことになり、週末は家族そろって過ごすという、イタリアの夏の生活です。

健康の次に来ることは、堅苦しく言えば、礼儀作法です。三歳までは、いわゆる赤ちゃんとして見なされ、育てられますが、三歳を過ぎれば社会人として知っていなければならぬことをたたき込まれます。ごく当り前のことですが、「おはよう」にはじまるあいさつ、そして「ありがとう」。物事を頼む「頼み方」です。

これはすべて、家庭教育だと思えます。三歳を過ぎた子どもが、「水ほしい」「のどがかわいた」と言っても、「どうぞ、水をください」という言い方をしないかぎり、一滴の水も子どもの口には入りませんでした。こんな小さなことから、子

どもは、人に物事を頼む時には、どんなふう頼まなくてはならないか知っていくのです。そして常に、社会の中の一人として、子どもは育てられます。例をとれば、電車やバスの中でどんなふうにしなければいけないかは、小さい時から自然に身につけさせられます。走ってわれ先に席を取る感覚は、子どもの中は育ちません。たまに帰る東京で、第一に私がまゆをひそめてしまうのは、子どもにそういった教育がなされていないことです。電車の窓から外を見るのは、子どもにとって楽しいことに違いありません。けれど、自分の子どものそうした行動が他人の洋服、公共の乗物のいすをよごそうと一向に平気な顔をしている親が多いことです。自分の子どもさえよければ……という親の感覚、それは、知らず知らずのうちに、子どもの中で育っていくと思います。ちょうど、空気を吸うのを意識しないのと同じです。

「居間で人の前を通らない」このことは、私は祖母から大分しかられました。現在の日本の多くの母親は、そういうことをしつけないのでしょうか？ 日本の家庭で、子どもがどうしても通らなければならぬ時に、一言「失礼」と言っているのを見ません。家庭での子どものしつけは、イタリアにかぎらず、ヨーロッパでは大事にされています。これは、今も昔も同じことであり、しつけという型にはまったことで

なく、将来、社会人として育っていく人間として、最低の知っていなくてはならないことです。"スープを飲む時に音を立てない"これも、三歳からしつけられます。音を立てないのが礼儀だからということではなく、他人に不愉快な思いをさせないということなのです。当り前のことですが……。

☆ 家庭での過ごし方

現在の日本は、ヨーロッパにくらべ家庭でのしつけが大分劣っていると思います。その原因はいろいろあると思いますが、一つには、父親の不在があると思います。日本の社会情勢とイタリヤのそれとは異なるところも多いのですが、大きく違うことの一つに、夕食には父親が存在するということがあります。夕食時には、子どもが父親に、それこそ夢中になって、自分の現在の問題を話し、父親も熱心にそれを聞き、子どもの年齢にふさわしい答をします。日本では、あまりにも、子どもと父親の接する時間がないように思えます。長男は、この夏六歳になりましたが、三歳から行かせたモンテッソーリは木曜日が休日なので、彼にとって、水曜日と土曜日の夜は待ちに待った夜です。なぜならば、その二日だけは夕食を両親と共にとることを許され、九時半まで一緒に過ごすことが許されるからです。(次の日は、朝寝坊ができるから

です) 自分のほしい物の話を出すのも、こんな時です。

P T A というのもありません。その代りに、一週間に一日、決められた日があり、その日の夕方は、子どもの先生に会い、問題を話し合えるというふうになっています。何回か決められた日に出かけてみましたが、先生が子どもの小さな所まで見ているということになれば驚きもしました。行きとどくということは、受け持つ子どもの人数に関係のあることと思えますが……。

私共の大切な時間というのは、週末です。週末には、特別のことがないかぎり、山の家に出かけます。一家揃って、散歩に出かけたり、庭いじりをしたりして過ごしますので、健康のためはもちろんのことですが、そのような行動を通して、四季の自然を知るのではないかと考えています。学んで自然を知るのではなく、肌でそれを知るのです。さくらんぼは、さくらの木になるのであって、プラスチックや、化学による合成品でないということを知るのも、こんな時です。ありが巢を作るのも、くもが巣を作るのを見るのも、こんな時です。都市のコンクリートと石の建物、アスファルトの道路の中では見られないことなのですから……。